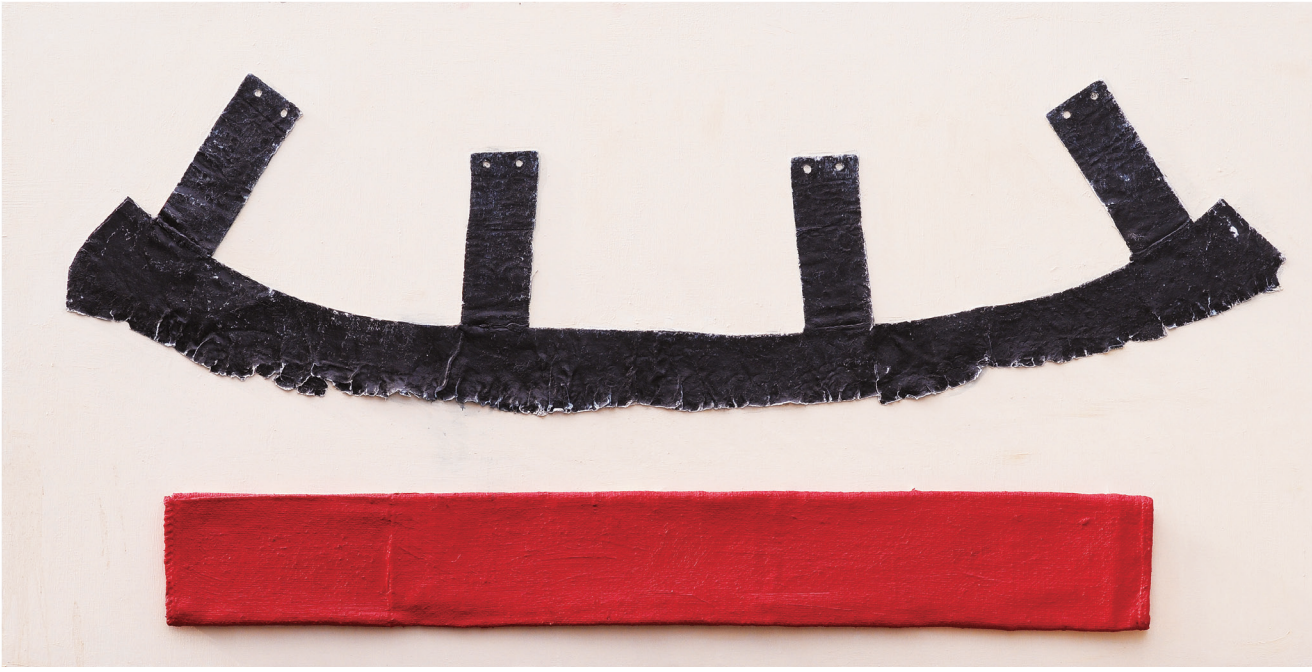

YOZO UKITA art works

Livre TOFOUN

人間とは、悲しみの塊である。
その哲理を体得して、
行為する作品を制作する。
それが正に「生」そのものと考える手段ではない。
生きている證としての作品の制作こそが、
人間の本業と心得て
生ある限り生きるべきだと思っている。

浮田要三

浮田要三の仕事

『浮田要三の仕事』
編集人：浮田要三作品集編集委員会
〈小﨑 唯 - 小橋慶三 - 猿澤恵子 - 扉野良人〉
テキスト：井上明彦、おーなり由子、加藤瑞穂、貞久秀紀、平井章一
エディトリアル・デザイン：扉野良人
制作人：浮田綾子 - 小﨑 唯
発行所：りいぶる・とふん
発行日：2015 年 7 月 21 日
書籍体裁：254 × 269 mm（B4 変形版）／ 316 ページ／角背背継上製本
定価：10,000 円（税抜）
問合せ先：*Livre* TOFOUN りいぶる・とふん
〒600-8051 京都市下京区富小路通り四条下る徳正寺内
tel/fax: 075-708-8303　*e-mail*: tobiranorabbit@gmail.com

現代美術作家 浮田要三の仕事の全貌が納められた、素晴らしい作品集ができました。
こんなに愛情いっぱいの作品集は、ほかに例がないと自負しています。
それらの想いは、スムーズには流れず、曲り、ぶつかり、滞り、溢れ……。しかし、その想いの強さ、熱さ、偉大さ、のおかげで無事完成させることができました。

小崎（こさき） 唯（ゆい）（浮田要三 長女）

浮田要三の仕事

目次

*

1. 具体の浮田要三
2.『きりん』時代
3. ウーちゃんの帽子
4. ハジメマシテ
5. フィンランド , フォルッサ
-1. ほとんど何もない作品集
-2. 北欧の土産と今日
6. 鉛橋
7. L

『浮田要三の仕事』は、浮田要三（1924 - 2013 年）の半世紀以上にわたる作家としての仕事をまとめた。

浮田の創作は 1955 年、吉原治良率いる具体美術協会へ参加したことに始まる。浮田は 1948 年創刊の子どもの詩と絵と綴り方（作文）の投稿誌『きりん』の編集者だった。表紙画の原稿を吉原の家へ取りに行ったのが出会いで、彼の許に集まる同世代の若い作家と交わるようになり、浮田自身も『きりん』編集と並行して創作に乗りだしたのだった。

吉原はじめ具体メンバーは、『きりん』誌面に踊る子どもの自由奔放な表現に驚き、なおかつ自分たちの創作にインスピレーションを得た。子どもの絵とほとんど変わらない具体メンバーの作品が『きりん』の表紙を飾ったのは浮田の采配でもあった。

浮田は編集者を通じて作家になったのだが、それは経歴上のことで、浮田が終生大事にしたのは「人間の値打ち」がどこにあるかだった。その上で「芸術が本来の人間の仕事」だと考えてきたからである。

しかし、浮田の来歴は身の振り方、すなわち生き方（いきかた）として興味深い。『きりん』が経営上立ち行かなくなり、版権を東京の出版社に委譲すると（浮田は『きりん』を編集だけでなく運営もしていた）、具体もやめてしまって、小さな袋工場を営んだ。1960 年代、日本が高度経済成長の真っ只中にあるときだ。この時期、いっさいの創作から離れた。

浮田が本格的に創作活動を再開するのは七十歳を超えてからである。

しかし、その十年くらい前から、徐々に作品制作を再開していた。1983 年に具体メンバーだった嶋本昭三に誘われてドイツ、デュッセルドルフに現地で制作、発表するグループ展へ参加したのが、浮田の意欲を駆りたてた。「作品をつくるために、それ以外の実生活をどう考えて行為するかということの大切さを 60 歳間近になってはじめて学んだ」という。

その頃の作品に「帽子（ハット）」の連作がある。白の絵の具で固められた帽子が、それも一面を白く塗ったキャンバスに引っかけるように置かれた、虚飾のない作品である。浮田を知る人は、彼の頭にはいつも帽子があったことを思い出す。だから、白い「帽子」は浮田の自画像だろうと首肯く。

人が人として、自分が自分から隔てられているという壁に突きあたり、その壁（キャンバス）へ、かぶっていた帽子をそっと置いたところに、浮田の「真に在りたい深いねがい」が籠められていた。

『浮田要三の仕事』は人間の値打ちの籠った作品集である

写真：小橋慶三